

の経済発展を問題にするかぎり、ロムバールの主張の正しさを必ずしも否定することはできない。さらに、イスラムの進出が、フィッシャーの公式 $P = \frac{MV}{Q}$ (P = 価格水準、 M = 通貨幣量、 V = 貨幣流通速度、 Q = 市場に投入されるべき財貨および用役の量) における諸関係を修正したか否か、とのチポッラの問題提起に対しても、ロムバールの所論はあるていどの解答を与えているとしなければならぬ。(この点で、チポッラの近著 *Money, Prices and Civilization in the Mediterranean World, 1956* もまた、ビザンツ、イスラム、フィレンツェ、ヴェネツィアの金貨が、

それぞれ、ある時期には国際通貨となつたのは、当該時期における商工業の躍進にもとづくとしたのは興味深い。——西洋史学36拙稿(参照)

三、しかしながら、貨幣発展と都市発展の相関々係を否定することはできないにしても、イスラム世界からの金の流入に対応して西欧都市が発展するためには、当時の西欧特有の社会経済的諸条件の存在することを見逃せない。従つて、イスラム都市の人口数と西欧都市のそれとを漠然と比較して、人口規模

の大きい前者の経済発展を強調するロムバールの所論は、事態の本質を見あやまつていないとしなければならぬ。ただし、別の機会(拙著「ヨーロッパ封建都市」創元社刊一五四—一六六頁)に指摘したように、都市の人口規模の拡大は、多分に政治的条件にもとづきもので、西欧都市の人口数が一般にそれほどでもないのは、必ずしも、西欧都市の経済的後進性を指途するものとはならないからである。この点で、超西欧的な貨幣経済の波のなかで、西欧都市がいかにして発展したか、西欧自体の内的諸条件が、今後究明されなければならない。

四、さらに、このことに関連して、地中海域は別としても、イスラムからの金の流入がどのようにして西欧全般に滲透したか、その具体的転機を明らかにする必要がある。かつてわたくしが指摘したように(前掲拙稿)、北西ヨーロッパの都市発展において、少くともその成立期に関するかぎり、イタリアの影響は認められず、そこでは、ノルマン経済圏への対応が直接の問題になつていとすれば、西欧都市の発展が、究極的には、イスラムからの金の流入にもとづくとするだけでは充分

でない。ロムバール自身も認めた、現在とは全く異つた当時の経済的条件下において、必ずしも現実のイスラム貨幣が西欧全体を席捲したわけではないのに、何ゆえに、西欧における都市発展の究極的原因をイスラムからの金の流入に求めなければならないか、あらためて問わなければならないからである。

——鯖田 豊之——

笠原一男著

親鸞と東国農民

真宗教団史、特に一向一揆の研究で名のあつる著者は、近來、親鸞の研究に没頭しその成果は、「東国における念仏禁止の必然性と親鸞の帰洛」(日本歴史九六)、「東国における真宗の発展とその社会的基盤」(歴史学研究一九八)、「親鸞における護国思想の意義と限界」(史学雑誌六五—一〇)、「教行信証の成立」(封建社会真宗教団の展開)となつて発表されている。本書はそうした成果を手ぎわよくまとめたものである。然もこれは、著者の

企図する真宗教団成立史の研究の第一部であり、従来の真宗史研究においてみられた盲点をうめようとする野心的な労作である。而して本書に対してはその後、家永三郎氏（史学雑誌六六—七）や二葉靈香氏（真宗研究第三輯）等から批判論文が提されているが、いずれにせよ本書の刊行を契機として問題が方法論の問題にまで深められようとしている事はよろこばしい。以下、本書の内容を、それに加えられた諸批判を参照しつつ紹介しておく。

一

まず本書は、十二章をもつてなつてゐる。第一章「親鸞をめぐる諸問題」では、史料的に制約の多い親鸞の諸問題をあげ、その未解決の問題が東国社会の構造を究明する事によつて別に解明しうる余地のある事を指摘している。このみとおしは正しい。従来蓋然的な論議に終始される事の少くなかつた親鸞研究に、一つの新しい軌道を与えたものと考ええる。

第二章では問題を「東国の社会構造」に指向し、親鸞消息にもいう東国の領家・地頭・名主の規模と構造を新田・留守・真壁氏に例

をとつて考え（第一）その所領構造と経営形態を問題にする（第二）。永原氏等の業績にもつき此処では在地領主層の総領体制が具体的に実証されている。つづいて著者は在地領主層に所有支配された在家・田畠の構造を考え、東国の場合在家農民と名主の關係が先進地帯における如き散りかかり的な關係にあるものもあつたが、名主相互が族的關係にあり、総領の下に統率される場合が多いために、名主に対する農民の隷属性が強かつたと論じている（第三）。つぎに氏は在家農民の没落や成長の過程を問題とし（第四）東国の在家農民は、勿論耕作権の獲得や職の分化という点で先進地帯といちじるしく对象的ではあるが然し、耕作の規模や耕作地の存在形態、さらに在地領主との關係において近畿の名主層の動向と類似すると指摘する。さらに氏は以上の地頭・名主の外に在家田畠の所有者としての寺社をとりあげ（第五）それらも地頭・名主と同じ性格と利害をもつて在家農民に対していたと実証する。そして領主・地頭・名主と百姓の關係をまとめて、その総領的支配の原則を乱す者に対する在地支配者が全力をあげて弾圧の拳に出る在地の動向を強調してい

る（第六）。氏の力説する、東国における真宗教団発展の限界と、親鸞帰洛理由の史料的立場は正にこの分析を通じて得たものである事を忘れてはならない。この第二章は當著において最も重点のおかれた一章で、紹介された豊富な諸史料は著者のたゆみない努力を物語つてゐる。然しこの章は、社会経済史自体の問題としても今後尚、問題とさるべき内容をもつてゐるが、それと共にここで特に指摘しておきたいのは、このような成果を親鸞の研究に寄与せしめ、それを有機的に認識しようとする場合、複雑な方法論の検討がその前提課題として存在するという事である。

第三章「親鸞と法然」以下は、東国社会の研究成果を見場とし、既往の親鸞研究を手がかりとしてその所説を展開させて行く。

第四章「親鸞の教説」ではまず従来、親鸞の理由を布教の目的をもつたものと断じ、入闍直後から活潑な布教を展開したという（第一、第二）。つぎに布教の内容に目を転じその根底をなす信をとりあげ廻心の時期を問題とする。そして氏は、家永氏や川崎氏の所説に対し建仁元年説を強調（第三）、それにも

とづいて念仏為本の教説を論述している（第四）。親鸞の思想形成において、法然に帰投した建仁元年を重視するこの所説に対し家永氏は次の如く批判している。即ち、笠原氏が唯信鈔の影響を重視する事に反対するものも、建仁元年の廻心説を強調するためであろうが、然しこの所見によれば、法然以外のその後の思想の影響が本質的なものでなかつたという事になる。然しそれでは、法然と親鸞の思想の論理的構造の相違や、親鸞が法然をこえて前進した思想の歴史的内容が説明出来なくなる。親鸞の東国の体験が、その思想の完成に極めて重要な意味をもつていたと考えるが、この点東国農民を強調する笠原氏が、かえつて東国農民の影響を否定する考えをとられる事になると反論している。

第五章「教行信証の成立」は著者が、第二章について大きな抱負をもつて世に問う一章であろう。まず氏は、従来の元仁元年撰述説と帰洛後撰述説の論拠を対照紹介し（第一）、つづいてその成立を成立事情の究明において解決しようとする新しい視角と成果をもつ宮崎氏と結城氏の両説をあげて検討している。そして氏は、成立事情を考えなおそうとする

結城氏の研究態度をもう一步進めて成立の動機にまでたしかかえつて考えようと提案している（第二）。かくて氏は、親鸞が時おり本願への信の不安をいだいたとし、その支えのために教行信証が生れたと断言する（第三）。

然もその成立過程については、結城氏の信巻別撰説に譴意を表しつつかえつて信巻先撰説をたて、その時期を入関直後若しくは在越時代と推定し（第四）、全体の成立を在関中と考へ（第五）、さらにその論説を強化するために帰洛後撰述説を再批判している（第六）。

氏のこの新しい見解に対して今後多くの反論の出る事は豫想されるがここでは二葉氏の批判を紹介しておく。笠原氏が、本願への信をたかめ支えるために教行信証が成立したという見解に対し二葉氏はまず、この所説は、信の不安が教行信証撰述という親鸞の行為によつて支えられると考えるもので、それは親鸞の否定した自力の信となる。教行信証が信を支えるのではなく、それは信によつて支えられている、所詮笠原氏は信と歴史的行為との関係の把握に失敗したというのである。従つてここでは、信巻先撰説も必然的に否定される事となる。つぎに笠原氏が、親鸞は教行

信証を公開のために作製したものではないといった事に対し二葉氏は、あくまでもそれは律令仏教の批判を一つの契機として成立したものであり、公開を豫想しないでは意味をもたない」と断言している。

第六章では「東国における真宗の発展」をとりあげ、東国の同行をその数、万以上とみつもり、その勢力が政治権力者へのシゲキとなり、念仏禁止、親鸞の帰洛となる一連の系譜を提示する。

第七章「真宗受容の社会的基盤」では、従来問題となつて来た服部・赤松・家永氏等の諸説を吟味し（第一、第三）氏は真宗の社会的基盤を在家農民におく（第一、第二）。この所説を論証する手だてとして、既往の諸説がそれぞれ問題として来た悪人正機説をとりあげ（第四）具体的に考証している。尚、氏は在地領主層と農民の対立性をここで再び問題としてとり出し、然もこの対立において鎌倉期では支配者が、力をもつて反念仏者側に立ち得たが、以後念仏の禁止をその力で推進し得なくなつた場合本願寺教団の一員に入りこむ方途をどうとしたりと解し、戦国期への展望をこころみている（第五）。当章に対し

家永氏は、武士と罪惡觀の問題を中心として考え、殺人を榮誉とする武士の世俗道徳と信仰とは意識の次元を異にするものであり、笠原氏の思想理解のし方に大きな欠陥があると反論している。家永氏のこの反論は、後にもふれるが、笠原氏の著述全体の方法論に対する批判として注意すべきである。尚、二葉氏も宿業の思想と社会的立場との關係から、笠原氏の宿業觀把握に（p302）混乱があると批判している。

第八章「念仏禁止の必然性と親鸞の帰洛」では、在地領主層の農民支配の原則が、真宗教団のひろまりによつてゆすぶられ、必然そこに念仏への弾圧が生じたと言き、親鸞の帰洛をこの理由において指摘する。従来、親鸞帰洛の原因は撰述やその他二、三の理由によつて語られて来たが、氏はここでそれら一切の理由をすてさり、文暦元年の念仏彈壓によるものと解している。氏のこの所説は、帰洛年次を文暦以前に推定する人や、念仏禁止の歴史的意義について異見を有する人々から以後活潑な反論をこらむる事となるであらう。

第九章の「親鸞傳授後の東国教団」においては、関東における真宗初期教団の勢力的抗争

や、教義上の対立をとりあげて考証している。第十章「善鸞を中心とする教団の形成」では、東国下向の善鸞の立場や教説（第一、第二）さらにその策謀による東国門弟の分裂について（第三、第四）考察する。

第十一章「善鸞による東国門徒の告訴」においては、地頭名主と協力して、正信の念仏者を弾圧しようとする善鸞の告訴事件をとりあげ（第一）その進展（第二）、正信の念仏者の勝利（第三）、善鸞の義絶（第四）を論述する。当章において、氏は、佐藤氏等の訴訟制度の研究を参照しつつ、建長の訴訟事件を具体的に説明している。唯、近來善鸞の間像に対し種々の見解が生じ、その行動を弁護する所見も少くはないが、この点善鸞の教説を今一步深めて東国農民の宗教要求と連関して考察しその挙動を歴史的に評論してほしいものである。

第十二章「親鸞における護国思想の意義と限界」は、これ又活潑な諸論議のある所で、それらに対し氏は独自の見解を披瀝している。まず氏は護国思想をめぐる服部、赤松、

二葉、古田氏等の見解をあげ逐一批判し、この問題は有無の二者択一的論議ではなく別の

角度から説明する要があるとし、消息を中心として建長七年より以後の諸段階を歴史的に考察し、次の如く論証する。即ち親鸞の護国思想は、正信念仏が守りうる間は方便として表明されるが、一たん弾圧が下り念仏を放棄すべき段階に追いこまれた時、その表明は影をひそめるに至るといふのである。この所説に対し二葉氏は、親鸞が護国思想の方便によつて念仏が弘まると考えていたとするならば、それは「余の人を強縁」として念仏をひろめる事と一たいどれだけ相違しているだろうかと反論している。二葉氏の反論が笠原氏の所説を適切に説いたものであるかどうかは笠原氏の再反論をまたねばならぬが両者の所説に今、交わる事のない行き違ひを感じるが如何であらうか。

以上ごく概略ではあるが本書の内容を紹介し、それに対する家永、二葉氏の批判をみて来た。つぎに項を改め一、二卑見を述べてみよう。

二

先述した如く、従来の親鸞研究がその著述や消息のみによつて、ややもすれば近視眼的

な詮索に墮する傾向を有したのに対し、本書は近來急激な進歩をとげた社会経済史学の諸成果を咀嚼受容し、まぐちの広い態度をもつて問題を展開させようとする所にその新面目をもつている。然し社会経済史と思想史の諸成果を統一的に把握するという事は、問題の危大さの故にその方法的操作において尚多くの前提的工作を必要とする。この意味で家永氏が「親鸞がその内にあつた東國の社会構造ばかりでなく、その精神構造をも綿密に検討する必要がある」と評し、さらに「親鸞の思想にふくまれていない組織の問題から直ちにその思想を論じていられるのは、親鸞の思想へのアプローチとして、はたして妥当であらうか。著者がその最も得意とする本願寺教団の組織についての研究方法を教団否定論者であつた親鸞の思想の研究に対しても無差別的に適用しているように思うのは私のひがめであるるか」という提言はけだし当を得たものと考へる。本書の場合、家永氏は、社会構造のみでなく、精神構造をも検討する必要がある、精神構造を如何に認識し把握するかという点にまできわめて指摘してよかる

評

書

う。この点本書は、現代の真宗史が到達した一頂点を示すと共に一方それを越えて飛躍しようとする場合の難関門を、我々に身をもつて表明しているといつても過言ではあるまい。而してこのような方法的未熟さ——これは決して笠原氏一人の能力の問題ではなく、現代における真宗史学の致命的な限界の一つと考へる——は今後あらゆる人々の手によつて克服されるべきであらう。いずれにせよ本書においてままみうけられる説得力の稀薄さは、多かれ少かれこの基本的問題に連関し、それから派生する所のものである。つぎにそうした面の疑問ないしは要望の一、二をあげてみよう。

まず、東國農民の諸神諸仏否定の問題である。そうした否定動向は、親鸞の消息やその他によつてもうかがいける所であり、又一向専修の立場からいへば理論的な必然をになうものでもあるが然しそうした必然や一部の史料によつて東國農民の全行動を色別し、念仏弾圧の理由をそれのみに帰せしめ、さらにそれによつて在地領主層の支配原則が破られるとするのは如何であらうか。この所説は、在地農民の諸神諸仏の否定内容と（本書P17

6、320、321）条件に關する克明な説明をまつて論断されるべきであり、それをともなわない論評は我々にいちじるしい不安をいだかせる。諸神諸仏に対する、特に覚如以後の教団動向をみる場合に、問題を単に教理的必然において語るのみであつてはならず、民衆の生活感情において充分分析されねばならぬ事がわかるであらう。

つぎに本書が終始一貫してその論拠とする階級対立についての疑問である。氏の如くその対立性を重視するならば、既に普田氏も指摘し（史学雜誌六六一—〇P73）又初期真宗教団と武士との關係を重視する所から、必然言及されるべくしてなされた家永氏の批判にもあるが如く、東國における親鸞の社会的地位は概して名主的なものとしてみるべく、（即ち三善氏との關係を是認し、そこに生活資源を求めていたと考へる限り）そうした階級の者がその布教対象を、対立する在家農民にとつた事の矛盾が表面化する事となる。勿論この矛盾に乗じて、そうした親鸞の地位の仮定から直ちに親鸞には同階級としての武士にその布教をなしうる蓋然率が高かつたと考へる家永氏の安価な指摘にはいまでもなく

反対だが、とにかく階級的な図示はあらゆる面で論理の破綻をきたすものである事を銘記すべきであろう。大体、菅田、家永両氏のこのような批判自身、批判されねばならないが、本質的には笠原氏の所説がもたらした混乱の一コマである。階級をこえた人間親鸞の立場にたちかえつて問題は進めらるべきであろう。同様な事が、農民の念仏による横の連絡が総領制的支配の動揺をまねき、在地領主層はその不安によつて必然念仏に弾圧を加えるという見解にも指摘出来、これ又いま一歩きめのこまかい基礎的工作と方法的な反省を必要とする。一体氏という横の連絡とは具体的に如何なるものであろうか。歴史学研究二二三（昭和三十二年十一月）で西垣晴次氏は、道場主と門徒衆の關係が総領制的な支配關係になるのを恐れての弾圧だと解し、横の連絡のゆくえをかく考えているが、然し中世末までみられた強固な東国社会の支配体制と、全体的な勢力の尚かつ不明な門徒衆の横の連絡の実態に関する実証なくしては、支配層の不安という事も弾圧の真相も、具体的に何らの史的根拠をもたぬ思いつきだといわれても仕方あるまい。一向一揆時代における

農民の惣結合の概念をもつて、東国における領主層と農民の關係を推測しうるものかどうか、極めてうたがわしいものである。されば第七章第五節の所説も又、重要な示唆を与えらるものようではあるが今一その史料的うらづけを必要とする。つぎに親鸞の布教の問題であるが、既に三十二年度真宗史研究会大会（公開講演会）で「親鸞の布教の性格について」論じた藤島教授の示唆にもあつた如く、親鸞の生涯における布教動向に、山と谷間をわけて考える仕方は果して真実をうがつものであるか。勿論そうした仕方は笠原氏のみでなく、従来の真宗史における一傾向でもあつたが、門弟の数量から（親鸞門侶交名帳のみでその動向を決定づける事の困難さは藤島教授の所見にあるが如くである）のみそれを推測して行く事ではなく、親鸞の宗教体験や生活態度にたちいたつて論ずる余地があり、そこに親鸞研究の本質的な課題がひそんでいるとさえ考える。

この点今後の課題としてその成果は期待されてよからう。尚こまかい事で恐縮だが、氏は承元の法難に当り、善惠房証空が遠流に処せられたというが（P146）、一度師は遠

流に定められたが無動寺の前大僧正に申預られ（歎異抄、法水分流記）その難をまぬがれている。又、恵信尼が晩年関東から越後に帰国したというが（P159）、今日、関東↓京都↓越後のコースが有力な所説となつていゝる。以上いずれもその叙述成文に慎重を期していただきたい。微細な論考にちちいつていゝる親鸞伝をあつかう場合、異常なまでに神経質な読者の態度を常に豫想して論述していただきたいものである。

以上縷々申し述べたが然しそれは決して本書の欠点をあげつらねんがためのものではない。先述の如く本書の価値は、既往における真宗史の盲点をつきその解明に努力した点と共に、今後真宗史学が發展するための基本的な課題を著述全体で表明し、ともすれば抽象論や単なる思弁に流される方法論的課題をうきぼりにした点で高く評価さるべき著述である。この点本書は、かつて真宗史において山田文昭師がものした諸著作にも匹敵し、現代の翻期的な労作として永くたえられて然るべきであろう。（A5版昭和三十二年四月山川出版社発行、定価一、二〇〇円）